とある乙女達の聖戦【ジハード】

璃瑠@＆不幸K＆愉快な仲間たち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある乙女達の聖戦【ジハード】

【Ｎコード】
Ｎ８３４１Ｊ

【作者名】
璃瑠@&不幸Ｋ&愉快な仲間たち

【あらすじ】
２月１４日、ある少年は不幸ではなく幸福を感じたような感じなかったような……

（前書き）

グダグダ王子↑の短編

よろしくさん？

２月１４日、その日、とある高校のとあるクラスの１人の少年に全世界の男子が嫉妬するようなことが起こった。

φφφφφφ

『ですからぁ、この能力については未だ解明されてない部分があるのですよぉ』

キーンコーン、カーンコーン

授業終了のチャイムが校舎に響き、時は既に放課後となっていた。

『はい、それじゃ今日はここまでです！吹寄ちゃん、号令……って上条ちゃん！授業はおわってるのですよ！』

担任である月詠小萌の声にも無反応なこのツンツン頭の少年、この物語の主人公、上条当麻その人である。
いつものように寝不足な上条は、１日を寝て過ごしていた。

『先生、職員室に戻ってください。私が上条当麻に制裁を下しますので……』

そういうと吹寄制理は上条が起きないまま号令をかけた。
最後まで渋っていた小萌先生も、吹寄のやる気（または殺る気とも言う）に圧されて帰って行った。

さて、肝心の上条であるが一向に目覚める気配は無い。

吹寄は前髪を髪留めで留め、額を露わにした。
これが上条曰わく、吹寄制理の真の姿……吹寄オデコデラックスだったりする。

『さぁて、上条当麻、永眠が貴様のゴールだ……』

吹寄が指をパキパキと鳴らしたと同時に、上条はガバッと起き上がった。

（……なんだ、さっきすげぇー嫌な予感がしたんだが…）

上条が顔をあげると、周りからは次々と舌打ちが鳴る。
何なんだよ？お前らはなんでそんな残念そうな顔をしてんだ？という上条の疑問に答えるがごとく、吹寄がズイッと前へ出る。

『おぉ、吹寄。なぁ、なんで周りの視線が俺に集まってんだ？いや待て、何で拳を鳴らしていらっしゃるのでせうか？しかも吹寄オデコデラックスだし――――ぁあああああ！？』

行間

『あの、これ…宜しければどうぞ？……うーん、やっぱり少し硬いかな？』

学園都市、とある公園に悩める乙女が1人いたのよな――――

『って、勝手に入れちゃったけどいいんですか？』

『別に間違ったことは言っていないから、問題はないだろうさ。それより五和、あの調子じゃ少年にチョコを渡すなんてできないと思うのよな。』

この勝手に人の心配をしている爆発頭、名を建宮斎字。
首に扇風機のようなモノを幾つかぶら下げている、端から見ればただの変人さんだったりする。

『誰が変人なのよな！』

『ちょっと建宮さん！誰と喋ってるんですか？』

さて、こそこそと隠れているこの変人＋αとそれらに見守られている五和という少女は、イギリス清教『必要悪の教会』に所属されている『天草式十字棲教』の面々である。

『う～ん、やっぱりもっとこうインパクトがあるやり方じゃないと……で、でも女教皇みたいにあんな格好しても…と、というより絶対に無理！恥ずかしいし！』１人もやもやしている五和を、ただただ生温かい目で応援する建宮斎字率いる『天草式十字棲教』だった……。

φφφφφφ

さて、再び所変わってイギリス清教『必要悪の教会』女子寮。

そこには修行中の様々な修道女達が……

『シスターアンジェレネ、私が置いてたラッピングした箱を知りや

がりませんかね？というか知ってやがりますね…』

『わわっ、ちょちょっとシスターアニェーゼ、お、落ち着きましょうよ？そりゃ何のアレもなくて置いてたら、食べていいと思っちゃうじゃないですか？』やっぱり犯人はアナタでしたかぁ！と寮内を駆け回るちびっ子シスターを後目に、雰囲気がおっとりとしたシスターが冷蔵庫から中くらいの箱を取り出して、荷物を取りに来た郵便屋に手渡していた。

『ふぁ～……ん、オルソラ、今のは…』

『はい、日本にいらっしゃるあの人にお送りするものです。あぁ、皆さんにあげる分もしっかりと準備してますよ？』

『そうか……だが今送ったとしても届くのは……』

『大丈夫です、ちょっとした魔術をかけて頂いたので…』

そうか、と気のない返事をして、ゴスロリの修道服を着た女性シェリーは再び寝にいくと、部屋へ戻っていった。
オルソラと呼ばれたおっとりとした修道女の少女は昼食の準備をするためにキッチンへと引っ込んでしまい、暴れまわるアニェーゼとアンジェレネを止める者はいなくなった……。

ΦΦΦΦΦ

『それじゃ上条ちゃん！コレはシスターちゃんと一緒に食べちゃってくださいね？』

『あぁ、どもっ……て、そっか、今日は１４日だったっけな…』

今日が何の日か理解した上条は、小萌から貰ったチョコを鞄にしまって挨拶をして職員室をあとにする。

ちなみにさっきまで居眠りの罰として、小萌の仕事を手伝っていたのだ。

『さってと、さっさと帰らないとインデックスから噛み砕かれかねないな……ん？』靴を履き替え玄関へと向かう上条の視界に、茶の髪にどこかで見たことのある制服が揺れているのが見えた。

『おーい、何やってんだビリビリ……って妹じゃねぇーか？どうした？』

『待ちくたびれました、とミサカは他の生徒が帰り始めた時間からアナタを待っていたことを告げます。』

と、学園都市でも有名なお嬢様学校である『常盤台中学』の制服に、軍用のゴーグルを着けた少女、御坂妹が玄関に居た。

φφφφφφ

『それで、俺にわざわざチョコをやるために、学校が終わる時間に玄関まで迎えにきたと。』

『はい、ですが中々出てくる気配が無かったものですから……と、ミサカはまるで彼氏が出てくるのを待つ彼女の気分で不満を訴えます。』

と、不満気に呟く少女を上条はその言葉もわからず悪いと平謝りするだけだった。

φφφφφφ

『あれ？確かあの娘って前アイツと一緒に居た……』

とある公園にて、『常盤台中学』のエース【超能力者】レベル５の御坂美琴は何かわたわたとしている少女、五和を見つけていた。

『何やってんのかしら？ていうか、あの手にある箱ってまさか……』

何かモヤモヤしたのち、ズカズカと五和へ向かって歩き出す美琴だった。

φφφφφφ

日は落ち、現在は夕刻。

上条は御坂妹を連れ、自らの寮へと帰ってきたのだが……

『ヲイヲイ、何で俺の家にお前らがいるんだ？』

ドアを開ければ見慣れない靴が二足、どちらも女性のものであることがわかる。

案の定、中に入ると女性２人が居候である白いシスターと談笑していた。

『貴様、随分と遅かったな？』

『お帰りなさい。勝手に上がらせてもらった。』

居間では学校でお世話になったばかりの吹寄制理と、同じく級友である姫神秋沙が姿があった。

『もぅー！遅いよ、とうまぁ！あいさもせいりも待ちくたびれちゃってるんだよ？』

と、帰ってきた家主の背後に視線を向ける白いシスターの目が、段々と病んでいくのが見えた。

『あのぉー、インデックスさん？何故歯をガチガチ言わせて近寄ってくるんでせうか？いや待て、落ち着けって！まぢで！ちょっと！ぁあああー！』

本日2度目の叫び声が轟いた。

φφφφφφ

さて、御坂妹についての説明を終えた上条は困っていた。

何故ならこの状況が原因なのだ。

『えっと……姫神のは手作りだよな？すんげぇー上手くできてると思うぜ？御坂妹も、かなり手間がかかっててスゴいな。で……』

『な、なんだ貴様！文句があるのか？！』

吹寄が上条に渡したのは、通販で売っている健康を第一に考えたようなチョコだった。
しかし女の子から貰ったものを無碍にはできないため、上条はありがたく（？）貰うことにした。

『しかし凄いなぁ……本命とか無いにしろ、貰えてるし…』

などと言いながら貰ったチョコを見ている上条を、あぁ、やっぱそう思うか……といった表情で見る女性陣の姿があった。

φφφφφφ

暫くして、玄関のチャイムが鳴るのを聞いて玄関へと向かう。さて、開けてビックリ、何やら団体様がご到着みたいだ。

『入るわよー』

『あわわわ、御坂さんそんな勝手に……あ、お邪魔します…』

『久しぶりなのよなぁ少年。おぉ？なんだ、既にお客さんが来てるじゃないか。』

最初に入ってきたのは御坂美琴、次にその美琴を慌てて追いかけてきた五和、そして最後に建宮率いる『天草式』の面々。
もう上条の家は一杯一杯である。
と、そこへ更なる追い討ちが重なるのだ。

『失礼、鍵が開いていましたので勝手にあがらせてもらいましたよ、何やら靴が多いようですが……って貴方達が何故此処にいるのです

か？』

黒髪のポニーテールに袖をぶった切ったジャケット、更に太ももを露わにするように切られたジーンズと腰に下げられた『七天七刀』がトレードマーク、我らが女教皇神裂火織が現れた。

ΦΦΦΦΦΦ

現在、上条家はカオスな展開。

神裂がやってきて、神裂の手には何やら大きな袋。
中身は女子寮メンバーからのチョコであり、シスターアニェーゼが泣けなしのお小遣いをはたいて買った、高級チョコなんかも入ってたりする。
ちなみに中身は3つ、オルソラが作ったチョコケーキとアニェーゼが買ったチョコ、最後の1つはもちろん女教皇のモノ。
それを知った五和が噛み噛みながらもチョコを上条へ、そこに美琴も手作りチョコ（本人は義理と言っているが、上条以外は信じておらず）を渡しそれに御坂妹が姫神が吹寄がという風に混沌状態。

『天草式』の面々や上条は外野でコソコソと密談していた。『少年、いい加減白状した方がいいのよな？誰が本命だい？』

『本命？いや、別にみんな義理でチョコをくれたみたいなもんだろうし……』

この少年の鈍感スキルは某ユニクロ並かそれ以上である。
そんな少年のこの性格が、この後も事態をややこしくしていくんだろうなと思う『天草式』の面々であった。

φφφφφφ

さて現在の時刻は２０時過ぎ、美琴は寮の門限があるからといって帰り、御坂妹も検査のために病院に戻った。
姫神と吹寄も、さっきまで皿洗いなどをしていたが流石にと思った上条が帰らせた。

そして現在残っているのは、小萌先生から貰ったチョコを頬張るインデックス、そのインデックスを暖かい目で見る神裂、そして何やらコソコソと話し合いをしている五和と『天草式』の面々。

皿洗いを終えた上条は、とりあえず今回貰ったチョコについて考えていた。

（アニェーゼ、五和、オルソラ、神裂、小萌先生、姫神、吹寄、美琴、御坂妹……結構貰ってんなぁ、来月ちゃんと全員に返さねぇーと…うっ、今月は質素に生きよう。）

そしてもう１つの考え事。

（誰が本命、か……んなこと考えたことも無かったな、まぁあいつらには俺なんかよりずっと似合う奴がいるだろうし、それにあの中の誰かが……なんてな、考えらんねぇーわ。）

上条はそんな結論を出した自分に苦笑し、思った。（まっ、不幸じゃないだけマシだな、今日は……）

Fin

（後書き）

タイトル意味不と思う人、手上げてｗｗ

どもー、ここじゃ前の名前の不幸Ｋでやらせていただいてます、伊坐薙です（、・ω・´）キリッ

今回、自己ショがてらの短編を書くどぉー！というわけで書かせて頂きました。
なんかもぅわけわからんｗｗ
つかキャラの口調が心配なのですぅ（、・ω・、）

とりあえず感想とか、待ってます。
もしかしたらまた短編で個別ルートを書くかもですが、その時も生温い目でみてやってください、では、ω、）ノシ

Ｐ．Ｓ．
１日早く更新しちゃった☆←

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8341j/

とある乙女達の聖戦【ジハード】

2010年11月14日00時08分発行